

多収品種「北陸193号」の単収900kgを確保するための施肥条件

1 背景・目的

水田利用率向上の観点から多用途利用品種の作付けが急増する中、その用途に応じた品種の多収栽培法の確立が求められている。県内では飼料米として検討されている多収品種「北陸193号」(図1)について、異なる施肥条件で栽培した事例から、900kg/10aの収量(粗玄米収量)を確保するための窒素施肥量を検討する。

2 技術のポイント

- (1) 単収900kg/10aを確保する窒素施肥量は15kg/10a程度である(図2)。
- (2) 15kg/10aを上回る窒素施肥は、成熟期の窒素吸収量を増加させるものの(データ略)、投入された窒素が収量に反映される効率(窒素玄米生産効率)が低下するので、増収効果は低い(図3)。
- (3) 以上のことから投入窒素施肥量を15kg/10a程度とし、単収900kg/10aを確保することが、施肥効率の点で最適である。

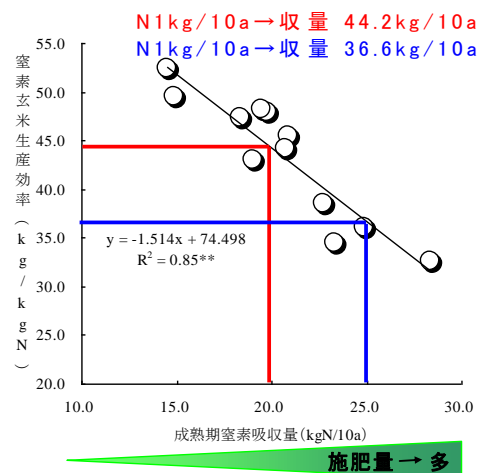
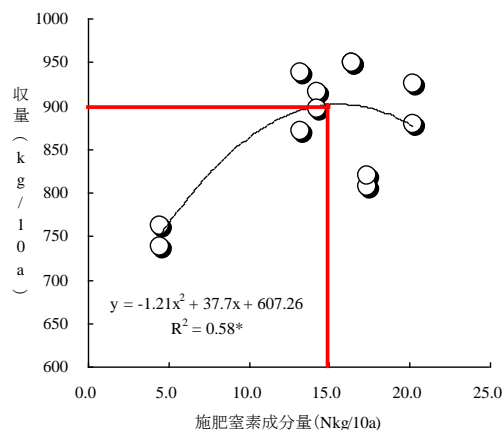


図1 「北陸193号」

図2 窒素施肥量と収量の関係

図3 成熟期窒素吸収量と窒素玄米生産効率の関係

3 成果の活用と残された問題点

- (1) 腐植含量2.1~2.5%で得られた結果であり、同様の土壌条件における施肥量の目安となる。
- (2) 晩期移植栽培や、直播栽培には適用できない。

問合先：作物栽培グループ TEL 076-257-6911
 担当者：永島秀樹